様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３１２０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１７８５７

研究課題名（和文）ウガンダにおける南スーダン人とキリスト教信仰覚醒運動：クク人に注目して

研究課題名（英文）South Sudanese and Christian Awaking Movement in Uganda: Focuses on Kuku People

研究代表者
飛内　悠子（Tobinai, Yuko）

盛岡大学・文学部・准教授

研究者番号：４０７７３４１１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：　英国での文献調査、およびウガンダ、および南スーダンにおいて研究期間中約1年の現地調査を行った。その結果明らかになったのは以下の3点である。①教派横断的に信仰覚醒者が存在すること、および信仰覚醒者間の関係性、②Scripture Union (SU)ウガンダ、南スーダン、東アフリカ信仰覚醒運動の現況と概況、SU、東アフリカ信仰覚醒運動の国際的なネットワーク、③クク人の集住地域であるウガンダ中央部カユンガ県、およびウガンダ北西部モヨ、アジュマニ県における東アフリカ信仰覚醒運動、SUの歴史と活動の様子。一部は論文として公刊済みであり、残りについても公刊準備中である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　信仰覚醒が教派横断的に認められる現象であることを証明し、教派間関係について明らかにした本研究の学術的意義は、基本的に特定教派を対象に研究を行ってきた従来のアフリカのキリスト教研究とは異なる視点を提供したところにある。本研究の成果を足掛かりとし、アフリカの信仰覚醒についての研究を確立することで、他宗教、あるいは他地域の信仰覚醒との比較が可能になり、宗教人類学の発展に貢献することが可能になるだろう。

研究成果の概要（英文）：A historical documents research was conducted in the UK, and field research was conducted in Uganda and South Sudan for approximately one year during the study period. As a result, the following three points became clear. (1) Cross-denominational existence of faith-awakening people and relationships among them, (2) current status and general situation of SU Uganda, South Sudan, and East African Revival, and international networks of SU and East African Revival, (3) Kayunga District in central Uganda and Moyo in northwest Uganda, which are the Kuku people's catchment areas, and (4) the history of the SU and East African Revival in Adjumani District, which is the Kuku people's catchment area, The history and activities of the East African Revival and the SU in Kayunga District in central Uganda and Moyo and Adjumani Districts in northwestern Uganda, which are Kuku gathering areas. Some of the articles have been published and the rest are in preparation for publication.

研究分野：文化人類学

キーワード：キリスト教　信仰覚醒　南スーダン　ウガンダ　クク

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

報告者は南北スーダンにおけるキリスト教拡大の過程について、主に人間の移動を背景とし、南スーダン･ウガンダ国境地帯を故地とするクク人に焦点を当てて研究してきた【業績欄参照】。クク人は東ナイル系のバリ語を民族語とする人口約 20 万人の民族であり、南スーダンの中で熱心なキリスト教徒が多く、近代教育への高い意識を持つことで知られる。他の南スーダン諸民族と同様植民地化、内戦等によって多くが故地を離れざるを得なかった。特にウガンダとの関わりの歴史は彼らの故地がウガンダ国境に位置するという地理的事情もあり長く、深い。

報告者は博士課程在籍時における調査の過程で、信仰覚醒運動のメンバーが移住・避難先において人びとの精神的、物質的支えであったことなどを知り、南スーダンにおけるキリスト教を研究する上での東アフリカ信仰覚醒運動の重要性を知った。

1920 年代末にはじまり、アングリカン・コミュニオンに属する教会を活動基盤として東アフリカの広い範囲で展開された神とそのひとり子への信仰を新たにした人びとによる、キリスト者としての「正しい」生活と宣教を使命とする運動、東アフリカ信仰覚醒運動に関しては、Kevin Ward と Emma Wild-Wood によって編集された The East African Revival: History and Legacies, Kampala: Fountain Publishers, 2010 をはじめとした研究の蓄積がある。だがウガンダ北部、南スーダンでの展開に関しては先行研究が乏しいうえに、現存する先行研究も運動が拡大する背景となるはずの紛争による移動が繰り返された土地という地域事情への理解が不足、またはそれをうまく反映できておらず、再検討が必要とされていた。そこで報告者は日本学術振興会特別研究員 PD としてカンパラでの文献調査、多くの南スーダン人の避難・移住先となったウガンダ北部で臨地調査を行った。結果、東アフリカ信仰覚醒運動のウガンダ北部、南スーダンへの伝播過程や、運動内における難民とホストの関係性のあり方とそれが運動拡大に及ぼした影響、そして若年層、高学歴者の間では壮年層が集う東アフリカ信仰覚醒運動とは別の信仰覚醒運動に参加する者が多いが、両者は必ずしも断絶していないこと等を明らかにした。報告者は研究成果を整理し、日本アフリカ学会、文化人類学会等で報告を行っており、今後論文執筆を行う予定である

そしてこの調査の過程で東アフリカ信仰覚醒運動とは異なる信仰覚醒運動が特に若者、そして高学歴層の間で大きな影響力を持っていることに気がつき、その調査の必要性に思い至った。それがスクリプチャー・ユニオン（SU）である。

SU は 19 世紀半ばに英国ではじまった若年層を主な対象とした超教派的キリスト教信仰覚醒運動である。現在 120 カ国以上で展開されており、そのうち 44 カ国がアフリカにある。ウガンダでは英国支配下にあった 1950 年代にはじまり、現在では全国的に展開されている。西部のホイマに本部が置かれ、その下部組織として６つの地区があり、各地区はそれぞれ支部を持つ。活動は主に中等学校のクラブの一つとして行われるが、初等学校や大学でも活動が認められる。参加者の多くが信仰覚醒者であり、その活動内容や理念は福音派やペンテコステ派と重なる部分がある。クク人の教会指導者の多くは、現カジョケジ教区主教アントニー・ポッゴをはじめとして SU 参加経験を持ち、そのほとんどは移住先のウガンダで SU に参加している。どちらかと言えば学歴を持たない一般的農民層を惹きつけた東アフリカ信仰覚醒運動とは対照的に、高学歴層を惹きつけた SU もまたクク人、そして南スーダン、ウガンダのキリスト教の拡大の歴史を語る上で重要な運動であるが、これだけ大きな組織であるにも関わらず、SU に関する人類学、社会学的研究は世界的にみても皆無に近い。報告者は SU の調査の必要性を感じると共に、SU と東アフリカ信仰覚醒運動との相違点等を知るに従い、ボーン・アゲイン、リバイバリストと呼ばれる信仰覚醒者たちのアフリカのキリスト教におけるプレゼンスの高さとその実態の捉え難さに気がついた。

18 世紀に英国とアメリカで起こった既存の教会、聖職者の堕落を糾弾し信仰の刷新を求める運動、キリスト教信仰覚醒運動は、現在グローバルかつ教派横断的に展開されており、ペンテコステ派や福音派もこの運動の流れをくむ。アフリカにおけるキリスト教拡大の歴史において、外来宗教であるキリスト教をアフリカのものとする際の原動力となった信仰覚醒者の存在は重要である。欧米とは状況が異なるアフリカで信仰覚醒者がなぜ生まれ、なぜここまで影響力を持つようになったのかは、アフリカのキリスト教、社会、文化を理解するうえで興味深い問いである。アフリカにおけるキリスト教の人類学的研究には厚い研究蓄積がある。その多くはキリスト教と在来信仰との関係に注目し、呪術と近代化を巡る研究とも絡み合いながら、キリスト教のローカル化の過程、改宗、信仰覚醒の理由とその影響等を明らかにしてきた（e.g.Brigit Mayer, *Translating the Devil: Religion and Modernity among the Ewe in Ghana*, Edinburah:Edhinburah University Press, 1999)。だが調査は基本的には調査対象教派を特定して行われたため、教派横断的に存在する信仰覚醒者の重要性を認識はしてもその全体像や実態を捉えることは難しかった。ウガンダにおいても、2013 年の反同性愛法可決におけるその影響が取りざたされるなど、近年福音派の台頭が注目されているが、福音派とペンテコステ派や主流教派内の信仰覚醒者との相違や、信仰覚醒者内の教派間関係についてはいまだ明らかにされていない（Lidia Boyd, ‘The Problem with Freedom: Homosexuality and Human Rights in

Uganda,' *Anthropological Quarterly*, 86-3, 697-724, 2013)。

２．研究の目的

本研究は、東アフリカ信仰覚醒運動、そして超教派的信仰覚醒運動体である SU のウガンダにおける歴史と実態を明らかにするとともに両者の関係についても見ていくことを通し、信仰覚醒運動の実態に迫ることを目的とする。これまで調査を行ってきた東アフリカ信仰覚醒運動をもう一度取り上げるのは、SU との関係性について調査が必要になるのに加え、ウガンダ南部での調査を行っていないためである。特に南スーダン出身のクク人と彼らの移住先を主な対象とする。南スーダンにおける SU の主な担い手であったクク人を対象とすることにより、ウガンダにおける運動の展開に加え、その南スーダンへの伝播過程についても見ることが可能になる。

３．研究の方法

研究手法は歴史的文献調査およびインタビュー、人類学的参与観察である。また、調査の具体的課題は以下のとおりである。①英国、ウガンダにおける文献調査とインタビューによるグローバルな運動である SU 全体とウガンダ SU の概要把握、②ウガンダ北部、南部それぞれにおける地域の運動指導者と一般参加者への聞き取りによる東アフリカ信仰覚醒運動、および SU の地域ごとの歴史と概要把握、③ウガンダのクク人集住地域における東アフリカ信仰覚醒運動、SU、教会の活動への参加を通しての両運動の活動の実態と運動内の教派間関係、そして両運動間の関係の解明、④ライフヒストリーの聞き取り、参与観察を通じての人々の信仰覚醒の理由とその生活への影響の解明。

４．研究成果

2017 年度は英国とウガンダにおいて、資料調査と信仰覚醒運動関係者へのインタビューを行った。また、2018-19 年度はウガンダにおいて運動の活動に参加し、関係者へのインタビューを継続するともに、南スーダンにおいて、主要教派に対し信仰覚醒に関するインタビューを実施した。2020-21 年度はコロナ禍のため現地調査を行うことができなかったが、これまで得られた成果を分析し、論文として、投稿、刊行した。2022 年度はウガンダ、南スーダンにおいて、信仰覚醒が人々の生活に及ぼす影響についての調査を行った。

以上の調査によって明らかになった点は以下のとおりである。

① 教派横断的に信仰覚醒者が存在すること、および信仰覚醒者間の関係性
信仰覚醒者、あるいはそれに類すると考えられる存在は教派ごとにその呼び名は異なるものの、どの教派にも存在した。その一方で信仰覚醒者が教派を越えて一つのアイデンティティを持つという状況にはなかった。ただしプロテスタントに関しては SU を通じ緩やかな関係性が作られていることを確認した。

② SU ウガンダ、南スーダン、東アフリカ信仰覚醒運動の現況と概況、SU、東アフリカ信仰覚醒運動の国際的なネットワーク
SU ウガンダ、南スーダンともに活動を行っていること、さらにその組織体制、メンバー数などをインタビューにより聞き取った。ウガンダの東アフリカ信仰覚醒運動についても同様である。また、SU ウガンダがアフリカ諸国や本部とつながり、それがその活動内容に影響を与えている状況も明らかとなった。

③ クク人の集住地域であるウガンダ中央部カユンガ県、およびウガンダ北西部モヨ、アジュマニ県における東アフリカ信仰覚醒運動、SU の歴史と活動の様子。
南スーダンを故地とするクク人が 1930 年代に就業の都合によりカユンガ県に移住を開始し、そこで東アフリカ信仰覚醒運動と出会い、現在も南スーダンとのつながりを維持しつつ活動を続けている様子、さらに第 1，2 次スーダン内戦、南スーダン内戦により多くの南スーダン人の避難先となったウガンダ北西部の難民居住地において、各学校に SU が設置され、SU ウガンダ、南スーダンの協力体制により運営されている様子が明らかとなった。

以上の成果は学会等で口頭発表を行っており、一部が論文として刊行されている。論文となっていない部分に関しては現在投稿準備中である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　6件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 飛内悠子	４．巻 61
２．論文標題 第2次スーダン内戦後における南スーダン人のウガンダからの『帰還』について：クク人を事例に	５．発行年 2023年
３．雑誌名 アフリカレポート	６．最初と最後の頁 69-95
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 飛内悠子	４．巻 102
２．論文標題 アフリカにおけるキリスト教信仰覚醒についての研究序説：南スーダンにおけるインタビューから	５．発行年 2022年
３．雑誌名 アフリカ研究	６．最初と最後の頁 13-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 飛内悠子	４．巻 86（1）
２．論文標題 攪乱者としてのキリスト教：『キリスト教の人類学』と近代	５．発行年 2021年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 115-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 飛内悠子	４．巻 10
２．論文標題 難民支援と信仰を基盤とした組織：北部ウガンダにおけるクク人とスクリプチャー・ユニオン	５．発行年 2021年
３．雑誌名 難民研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 117　131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Tobinai Yuko	4．巻 205
2．論文標題 The Variety of People in Refugee Settlements, Gender and GBV: The Case of South Sudanese Refugees in Northern Uganda	5．発行年 2020年
3．雑誌名 JICA緒方研究所ワーキングペーパー	6．最初と最後の頁 1-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 飛内悠子	4．巻 30
2．論文標題 植民地化と宣教師団：英国教会宣教協会アッパーナイル教区誕生の経緯から見る南スーダンーウガンダ国境地帯	5．発行年 2020年
3．雑誌名 比較文化研究	6．最初と最後の頁 11-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 飛内悠子	4．巻 82
2．論文標題 クク人と故郷カジョケジ：南北スーダンにおける人間の移動と場所の変容	5．発行年 2018年
3．雑誌名 文化人類学	6．最初と最後の頁 446-463
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 飛内悠子
2．発表標題 家の人と客人との間 ：南スーダンにおけるクク人の「住む」という行為を巡って
3．学会等名 第56回日本文化人類学会研究大会
4．発表年 2022年

１．発表者名 飛内悠子
２．発表標題 宣教師団と植民地政府、そして国境 ：英国国教会宣教協会アッパーナイル教区の運営と分割
３．学会等名 日本アフリカ学会第59回学術大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 飛内悠子
２．発表標題 第2次スーダン内戦後における南スーダン人のウガンダからの『帰還 』について ：クク人を事例に
３．学会等名 日本アフリカ学会第58回学術大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 飛内悠子
２．発表標題 アフリカにおける移住に関する一考察：クク人の南スーダンとウガンダにおける移動を事例にして
３．学会等名 日本アフリカ学会第一回東北支部会
４．発表年 2021年

１．発表者名 飛内悠子
２．発表標題 なぜクク人はウガンダ人になったのか？：南スーダンからウガンダ南部への移住とブゲレレの今
３．学会等名 日本アフリカ学会第57回学術大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 飛内悠子
２．発表標題 ボーン・アゲインとは誰か：南スーダン、ウガンダにおける教会、キリスト教関係組織へのインタビューから
３．学会等名 日本アフリカ学会第５６回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 飛内悠子
２．発表標題 迫りくる故郷、際立つ境界：南北スーダンにおける移住者家族の帰還を巡るミクロヒストリー
３．学会等名 日本文化人類学会第５３回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Tobinai Yuko
２．発表標題 Who Are the ‘Born Again?’ Findings from Interviews with Christian Church Members in South Sudan and Uganda
３．学会等名 European Conference on African Studies 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 飛内悠子
２．発表標題 移動再考に向けての一試論：南スーダン人の移住経験から
３．学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計3件

1．著者名 王柳蘭・山田孝子編	4．発行年 2023年
2．出版社 国際書院	5．総ページ数 340
3．書名 ミクロヒストリーから読む越境の動態	

1．著者名 錦田愛子編	4．発行年 2020年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 288
3．書名 政治主体としての移民／難民 ：人の移動が織り成す社会とシティズンシップ（分担執筆）	

1．著者名 飛内悠子	4．発行年 2019年
2．出版社 風響社	5．総ページ数 358
3．書名 未来に帰る：内戦後の「スーダン」を生きるクク人の移住と故郷	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関